57　近藤次繁はなぜ野口英世の手術を行えたのか？ 手術手技習得と日本形成外科の始まり

成島　三長
三重大学大学院医学系研究科 生命医科学専攻 臨床医学系講座 形成外科学

野口英世が1878年4月（1歳5か月）で囲炉裏に落ち左手が熱傷瘢痕により拘縮してしまったことはよく知られている．1884年（9歳）：1回目開指術（手指分離手術）斎藤幸元先生，1892年（16歳）：2回目開指術　渡部鼎先生によってなされたが，不十分であった．医術開業試験を受けるにあたって1897年に3回目の手術を東京大学医学部外科の近藤次繁教授によってなされた．1–2回目の治療が切開のみであり，再癒着・拘縮をきたしていたであろうことは容易に推察される．3回目の治療を受けるころには橋本綱常先生や佐藤進先生らが植皮術を取り入れた形成外科的治療をすでに日本においても開始していた．しかし現代において植皮術では拘縮が起こりやすいことが知られており，皮弁と呼ばれる血流のある状態の皮膚を治療に用いることが拘縮解除には有用である．近藤次繁教授は前腕部内側および手背からこの皮弁を用いた治療を野口英世に行っており，皮弁での再建方法が野口英世の手の熱傷瘢痕拘縮治療には最適であることを認識して皮弁を用いた治療を行い，拘縮解除としてはとても効果的であったことが推察される．この前腕皮弁術は1970年代になって報告されており，野口英世には80年以上前に使用されたことになる．またもしこの皮弁が太い橈骨動脈を含まず，橈骨動脈からの枝である穿通枝皮弁であったとすると，図らずも世界初の穿通枝皮弁手術が日本において行われたことになる．そこでこの皮弁の技術習得を誰にどこで学んだのかについて検討した．近藤次繁教授は1890年に東京帝国大学を卒業後，手術手技に定評のあったユリウス・スクリバ教授の外科医局に入局し，1891年から1896年までストラスブルク大学・ハイデルベルク大学・ベルリン大学，ウィーン大学などに留学したのちに帰国し，翌年に野口英世の手の手術を行っている．スクリバ先生の師匠にヴィンセント・チェルニー先生というハイデルベルグ大学の教授がおり，チェルニー先生のもとへも近藤次繁は留学していたと思われる．実はチェルニー先生は1895年に乳腺繊維腫切除後の患者に対して，脂肪を挿入する世界初の乳房再建を報告しており，近藤次繁はこの乳房再建を見学していた可能性がある．また彼の師匠は有名なビルロートであり，さらに同時期にハイデルベルグやウィーン近郊のインスブルックにカール・ニコラドニー先生がいた．彼は親指がない患者に足の親指を移植する方法を初めて報告している．そのころの形成外科分野では間違いなく他を超越した技術とアイデアを持っていた．もし彼の手術を見学していれば，間違いなく世界最先端の知識と技術を習得したに違いないと思われる．実は近藤次繁の留学ノート5冊が存在し，生誕100周年に故郷の長野県松本市にあった松本病院（現 信州大学医学部附属病院）へ寄贈されたが，残念ながら現在はこのノートは行方不明である．このノートが発見されれば形成外科的な皮弁手術を誰にどのように学んだかの詳細が判明すると思われる．帰国後1899年に近藤教授は東京大学医学部外科教授となり，東京大学医学部初代整形外科教授になる田代義徳先生を呼び戻したのだが，この田代義徳教授が済生学舎の外科の授業を受け持っており，野口英世の手術施行への過程で助力があったかもしれない．そしてその孫弟子にあたる，三木威勇治三代目整形外科教授の尽力により，三木威勇治教授の二年後輩にあたる大森清一先生によって東京大学医学部に形成外科が設立され，現在の形成外科の発展を見ることになる．このように近藤先生による野口英世の手の皮弁による手術はその時代だけでなく現在においても十分通用する最先端の皮弁治療法であった可能性が高く，日本人の器用さが現在まで脈々と受け継がれている起源となっていると思われる．